



待降節第 1 主日 (ルカ 21:25-28,34-36)

いつも目を覚まして祈りなさい

待降節を迎えました。カトリックの暦「典礼暦」はこの待降節から始まります。ですから典礼的には新しい年が始まり、主の降誕を待ち望む季節が始まったということです。待降節はラテン語で **adventus** と呼びますが、これは英語の **adventure**に通じる言葉です。つまり主の到来を、今か今かとワクワクしながら待つのが、待降節のよりよい過ごし方と言えるかもしれません。

おもしろい体験をしたので報告しておきます。2週間前の話です。カトリック教報の編集会議で日帰り出張した日、長崎で帰りの便を待っていたら韓国からの巡礼者かなという団体がたむろしてしまっていて、盛んに会話していました。わたしには「ハムニタ」「イモニタ」「ミギニセヨ」「ヒダリニセヨ」と言っているように聞こえました。

団体の中にシスターが混じってしまっていて、すぐに「この団体には司祭が同行しているに違いない」と直感しました。儒教の影響を多分に受けた国で、シスターが団長を務めるということは考えにくいからです。

しかしジロジロ眺めるわけにもいきません。船に乗る時点でも司祭の姿は確認できなかったのですが、結果的に思わぬところでわたしの読みは正しかったのだと証明されました。

船が奈良尾に到着し、タラップを降りてみると、「ようこそ」という横断幕が目飛び込んできました。新上五島町の職員なのかわかりませんが、桟橋で待っていた2人がいきなりわたしに近寄ってきて「アンニョンハセヨ」と声をかけてきたのです。

わたしはカトリック司祭が一般的に着用する司祭シャツを着ていたので司祭だとすぐわかる格好をしていました。お迎えに来ていた人々は、団体の中で真っ先に司祭に敬意を払おうと思ったのかもしれませんが。それは理解できますが、そうだとでも日本人か韓国人かは区別してほしかったです。「アンニョンハセヨ」と勢いよく話しかけてきた人に「イイカゲンニセヨ」と言いたい気分でした。

わたしのところに飛んできた2人は、待ちに待った団体さまが到着して、おあつらえ向きの格好をした司祭が見えた。これは間違いないと思ったのでしょう。愛想のない態度で過ぎ去ってしまい、彼らにはかわいそうなことをしたなと思いました。

福音に戻りましょう。待降節でわたしたちが待ち望んでいるお方も、実は飛んで行って挨拶をしてもよいくらい尊い方です。わたしたちが待ち望んでいる方は、2つの形でその力と栄光を帯びておられる方です。

1つは、神が人となってわたしたちのもとにおいでになり、人類の救いに必要なことをすべて成し遂げてくださった方です。その救いの御業は2千年前にすでに成し遂げられました。この救いの御業によって、力と栄光を帯びておられます。

もう1つは、ご自身が成し遂げてくださった救いの御業を、完成さ

せるために再びおいでになります。救いは、実際にすべての人が救われることで完成します。わたしたちは救いの御業の完成のために力と栄光を帯びてこられる救い主という形でも待ち望むのです。

わたしたちが待降節を通して待ち望む方は、一方ではすでに救いの御業を成し遂げてくださった方ですが、他方では救いの御業を完成させるためにおいでになる方です。この二つの姿を重ねて待つことで、わたしたちは目を覚ましていることができます。

「救いの御業は成し遂げられた。」このことだけを考えている人は、放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くなってしまいます。また「救いの御業を完成するために再びおいでになるのはまさか今ではないだろう。」そう考えている人も、心が鈍くなってしまいます。一方を思い描いて他方を顧みないなら、わたしたちは裁きを受けることになるでしょう。イエスの救いの御業の両面を忘れないよう心がけて日々を送る人、すなわちイエスの到来を正しく理解し、目を覚まして待つ人だけが、人の子の前に安心して立つことができるのです。

最後に、イエスは「いつも目を覚まして祈りなさい」と忠告します。

「祈りなさい」と付け加えたのを見落としてはいけません。わたしたちが神の勧めを立派に果たすためには、祈りが必要だということです。

「目を覚ましている」というと、自分で注意しておけば立派に果たせるように思うかもしれませんが、いつも神の助がそこには必要なのです。祈ることで、わたしたちは神の助けを常に求めることができます。

どこかでわたしたちは気を抜くことがあります。それを戒めるために、イエスは「いつも目を覚まして祈りなさい」と忠告しておられます。主の降誕を待つ待降節の期間に、心が鈍くならないようにと絶えず祈ることにしましょう。わたしたちを喜びで満たしてくださる救い主は、目を覚まして祈るその先で待っておられます。